

翻 訳

アヘン戦争で中国が海防に失敗した原因

原著：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*,
chap. I, pp. 1-18, Harvard Univ. Press, 1967.

ジョン・L・ローリンソン

訳：細 見 和 弘

中国は、1839年から1842年のアヘン戦争でイギリスに完敗した。1842年の南京条約は、最初の「不平等条約」であり、中国に西洋の衝撃（Western impact）の新段階を開いた。結局、儒教体制は西洋の衝撃に適應する能力がないことが証明された。1842年における中国の敗戦は、今なお進行している革命過程の出発点と称されるかも知れない。

中国に対する近代の挑戦は、ほとんど全てが海から到来したのだから、少なくとも1839年以来、旧中国は、陸上の要塞や軍隊を使うか、あるいは海軍を使うかにかかわりなく、沿海を防衛できなかったことになる。この失敗が、——とりわけ、適切な近代的海軍による防衛を創出できなかった清朝（1644-1911）の失敗が——本書の主題である。これは、歴史上重要な失敗の一つである。

なぜ清朝は、海で自国を防衛するのに失敗したのか？ 清朝が弱かったとか、衰退期にあったと言うだけでは、充分ではない。清朝は、恐ろしい太平天国の乱（1850-1864）を鎮圧するに足る兵力を集めたし、中国のそれ以外の場所で1870年代までよく続いた諸叛乱の場合もそうであった。「王朝の衰退」という認識は、道義や指導者の資質に関わるとはいえ、精査してみると、説明が充分ではなく、むしろ論点が巧みに避けられた因襲のように思われる。¹⁾ この場合、いずれにしても、近代的海軍が建設（あるいは購買）され、そして配置された。そして、二度の近代的な海戦に参加した。一つは、1884年から85年にフランスと戦い、一つは、10年後に日本と戦った。いずれの時も敗れはしたが、満洲族の「衰退」にもかかわらず、清朝の海防は近代化された。1830年代の西洋人は、馬鹿にしたような口振りで伝統的な中国水師に言及していたが（一人の英国人は、少数のニュージーランドの軍用カヌーでも打ち負かされる「巨大な戯画」であるとしてそれを解散させた）、1880年代になると西洋の専門家が近代的な汽船から成る中国艦隊を称賛するようになった。清朝の海防が近代化された結果、こうした水準に到達していたのは充分に確実なことである。²⁾

新しい艦船が集められた。しかし、清朝はそれらを効果的に使用しなかった。もちろん指導力〔の欠如〕は、効果が上がらない要因の中に含まれる。だが、支配層の中には有能な人物だけでなく不適切な人物も存在したのである。能力は、心構えや組織によって、換言すれば制度によって左右される。それゆえ、清朝が19世紀に海で自衛するのに失敗したことを説明するには、儒教中国の制度の構造を含めなければならない。ここで「制度」という言葉は、帝国の政治組織や文官試験制度のような諸現象を含む。そして、本書の主要な論点は、伝統的な中国の制度が海軍の効果的な近代化を妨げたということである。

中国の伝統的な水師は、アヘン戦争で最初の持続的な近代的衝突を経験した。イギリスは、自由貿易、中国との外交上の平等、そして治外法権の名の下に戦争を行った。そして、戦争は、アヘンの賠償を求めるためでもあった。1839年に欽差大臣^{りんそくじょ}の林則徐は、英中関係を長らく緊張させてきた密輸を全面的に根絶させるためにアヘンを押収・廃棄したのである。概して、イギリスは、古来の儒教的な朝貢体制を破壊しようと努めた。朝貢体制を通じて、中国は貿易を、蕃人が天子を崇拜する証とする儀礼に従属させたからである。

海戦は、1839年11月の穿鼻^{せんび}〔または川鼻〕の戦いで始まった。海戦では広東水師提督^{かんてんぱい}関天培の軍用ジャンク船が敵に破られた。数度の停戦後、イギリスは、1842年8月に南京^{ナンキン}で、その戦争を思い通りに終結させた。戦闘の最初の局面において、1840年の夏にイギリス軍は首都北京^{ペキン}の近くを流れる白河^{はくか}の河口まで北上した（ほぼ50隻から成る英国艦隊は、4隻の汽船を含んでいた）。この最初の北方海軍遠征で、イギリスは幾つかの沿岸の港に侵入して封鎖し、戦略上重要な^{しゅうざん}舟山諸島の定海^{ていかい}を占領した（1840年7月5日）。イギリスの目的は、中国の最も有力な高官にその要求を提示することであった。直隸総督の琦善^{きぜん}は、チャールズ・エリオット海軍大佐（Captain Charles Elliot）と会見し、彼を説得して艦隊を広東^{カントン}に戻らせた。引き続き会談が行われることが、約束された。1840年12月に、琦善とエリオットは、広州の近くで交渉を始めた。エリオットは、〔交渉の直前に〕珠江^{じゅうこう}の河口を守る穿鼻の要塞を占領したことで彼の要求を強めた。1841年2月、いわゆる穿鼻仮協定が起草された。イギリスは、その要求の一部を与えられた。そして、エリオットは穿鼻の要塞と定海を返還^{どうこう}した。道光帝は、琦善が協定を報告する際に真実を伝えていないことを知っていた。皇帝から見て、仮協定は譲歩しすぎであった。ともかく、合意は中英双方により拒否されたのである。

アヘン戦争の第二の局面は、中英の双方とも新しい指導部の下で始まった。失脚した林則徐の後任であった琦善は、軍事司令官^{えきざん}としては奕山^{きこう}に、総督としては祁項に交替させられた（権力の分割に注目せよ）。イギリス軍の指導者であるエリオット大佐は、サー・ヘンリー・ポットインジャー（Sir Henry Pottinger）に引き継がれた。1841年2月にイギリス軍は広州に進撃、河沿いの全ての要塞を占領し、広東官僚は賠償金を支払って広州を取り戻すことを余儀なくされた〔5月27日広州講和条約〕——無力な奕山は、広東商人の援助で資金をまかなった。二度目の停戦は、ポットインジャーが到着するまで続いた。この男は、定海をもう一度占領し、北方にイギリスの要求を提示せよとの訓令を携えていたのである。二度目の北方遠征は、1841年8月に始まった。定海は、10月1日に再び占拠された。冬になると戦いは休止した。それから、援軍を得たポットインジャーは、1842年の春に戦闘を再開した。彼は、1842年6月に広範囲にわたり無防備な禁断の長江に進撃し、ついに中国をねじ伏せた。中国はいまや、南京で条約を調印するために、新任欽差大臣^{きんさい}の耆英が代表を務めたのである。

このように、中国は新しい時代に駆り立てられた。中国水師は、この直近の「蕃人」の襲撃に対し自国を防衛しなかった。それは、実際には「アヘン戦争」ではなかった。それは、文明間の衝突であった。以下のページでは、伝統的な水師に関する体系的な概観を行う。例証となる素材の多くは、アヘン戦争から取られる。主として海戦であった戦闘であっても、それらの全てを検討する必要はないであろう。既に数多くの記事が存在しているからである。中国の伝統的な水師が抜本的改革を必要としていたことは、十分に明白になるであろう。

19世紀の初め、中国の平均的な軍用ジャンク船は小型船であり、排水量はせいぜい250トンから300トンの間であった。速度や利便性はさておき、そうした船舶は、1830年代に建造された米中定期船の排水量の約半分であり、ネルソン（Nelson）の時代の6等艦よりも小さかった。6等艦は、20門から28門の大砲と120フィート〔36.6m〕の下砲列甲板（lower gun deck）を有し、約600トンの排水量を擁したのである。⁴⁾ 伝統的な中国の写生画が示すのは、おそらく全長100フィート〔30.5m〕くらいのジャンク船である。船には、2本か3本のマスト、無防備な甲板、ほんの少しの兵器、それにおそらく一つか二つの戦闘楼が備え付けられていた。中国の造船所は、1,000トン以上のジャンク船を建造できた（英国1等帆走戦艦は、2,000トンから2,600トンの排水量をもち、100門かそれより多くの大砲を運ぶのであるから、それよりまだずっと小さい）。ところが、このサイズは、標準的な軍用ジャンク船ではなかった。⁵⁾

軍用ジャンク船の建造を中央で監督するが如く存在するのは、北京の工部であった。しかし、この政府機関は、主に〔非軍事的な〕文官の業務に関係していた。諸省においては、1732年以来、水師建設物に関するかなり精巧な制度が存在していた。水師の製造所をもつ各省には、修繕に関わる監督者がおり、下級の文武官を通じて行われた。⁶⁾ 19世紀中葉の一覧では、18の造船所が見られる。すなわち、広東省に5箇所、福建省に4箇所、浙江省に3箇所、江南の江蘇・安徽両省に5箇所、山東省に1箇所である。⁷⁾ 修理に関する規則は、外洋を航行する軍用ジャンク船に対し、3年で小修理を実行することができ、5年経てはじめて大修理が許されると明記していた。いくつかの例外が存在するので、制度は完全に硬直していたわけではなかったが、明らかに公金横領を防止するよう設計されていた。⁸⁾ 軍用ジャンク船は、建造費に基づき、等級に分けられた。そして、10年の命——18世紀イギリスの木造戦艦に見積もられたのと同じ寿命——を与えられた〔軍用ジャンク船は、建造して10年目に解体して造り直されることになっていた〕。⁹⁾

これらの造船所においては、全てが常に上手くいったわけではない。17世紀に効率性を要求する厳しい諭令が幾つも出されたのが、その証左である。時々、修理した後で数多くの軍用ジャンク船が動かなくなり、そのため海賊が好き放題に走り回った。あるいは、遅延があったり、費用が多く掛かり過ぎたりした。造船所が周期的に最も効率の良い状態に戻ろうが戻るまいが、アヘン戦争の時期において、外洋を航行する軍用ジャンク船の寿命は、7年と見積もられるまで落ちていた。¹⁰⁾

19世紀の軍用ジャンク船は、戦争の道具として明確に特化されてはいなかった。西洋では、大型海軍兵器が導入されたので、戦艦の船体と艤装は変化を余儀なくされた。そして、商船もこの例に従った。マルコ・ポーロを驚かせ、後に宦官の鄭和をアフリカ東海岸に運んだ中国ジャンク船の効率がどれほど良かったとしても、明末期には中国の商用ジャンク船は、軍用ジャンク船より大きく、速度も速かった。商用ジャンク船を使用する海賊を取り締まるために、明朝は、軍用ジャンク船のサイズを大きくするより、むしろ商船の大きさを制限しようとした。これに失敗すると、政府（この場合、清朝）は、悪知恵を働かせて捕獲を達成するために、政府の軍用ジャンク船を商人に偽装するよう指令した。¹¹⁾ しかし、海賊は食い止められなかった。それで、商人達はしばしば自主的に彼ら自身の防護船隊を建設するか、防護してくれる者を雇った。例えば、1809年に、広東の商人達は108トンの英国製ブリッグを購入した。後に彼らは、「中国海軍を補強するために」、広東省の監督の下で、350トンの船を借り上げようとした。¹²⁾ 1857年になってようやく、イ

ギリス人の現場証人達は、軍用ジャンク船に大砲があることを除けば、帝国の軍用ジャンク船は、商用ジャンク船と見分けが付かないと書き残したのである。アヘン戦争の間にイギリス軍と対戦したジャンク船の中には、¹³⁾ 籐製の盾を用いて乗組員を護ろうとした者もあったとはいえ、防塁と砲門は使用されなかった。明の海軍力の全盛期において、軍用ジャンク船は400人乗りが通常であった。しかしアヘン戦争の時には、〔乗組員の〕平均は100人に近かった。¹⁴⁾

この後戻りの結果、19世紀初めの中国水師は、色々な型がごちゃ混ぜになっていた。工部のリストに拠ると、27を数える型の海洋軍用ジャンク船が存在し、行き当たりばったり配置されていた（そのうへ、それらの型のうち五つは、内地の水路に使用された）。リストは、大きさやマストの数、またはその他同類のものにより見分けが付くように整理されてはいない。なかには、その型の名前が翻訳不可能なものや、完全に特定の地方にしか普及していないものや、見かけだけでは判別できないものがある。「漕船」という呼称が、しばしばリストの中に現れる。船の名前の中で奇妙なものには、アメリカの言葉で、多分「小指」や「出目」^{でめ}に符合するものがあり、そうした名前は、漁船に付けられるような名前であるとはいえ、中国の伝統的軍艦のリストは、ほとんど標準化されていなかったことを示しているのである。¹⁵⁾

同時代の西洋人の多くは、中国ジャンク船が航海する上で優れた品質を備えていることを認めていたとはいえ、戦う船として見た場合の西洋人による評価は、好意的ではなかった。1830年代に一人のイギリス人は、伝統的な軍用ジャンク船について次のように書いている。

むしろの帆、木製の^{いかり} 錨、籐製の^{びょうさ} 錨鎖、著しくそそり立った、平べったい直立船首、船尾の柱は無いが、非常に高い船尾があり、金色や絵画で飾られた、大きくて不格好な材木の集まりは、悪天候の時には巨大な^{かじ} 舵が持ち上げられ、その中に収められる大きな穴、広大な船側後半部にある船尾展望台、それに甲板にある見張り番の部屋によっても、著しく弱められた。通常は汲み上げられているが少量の水、平らな船床、船首は大きなぎょろ眼と共に赤と黒で塗られており、……250～300トンを超える船は、ほとんどない。¹⁶⁾

これらの軍用ジャンク船は、出鱈目なやり方で武装していた。外国人が書き残しているように、アヘン戦争の時に、各船に搭載された大砲の数は、4門から14門まで異なっていた。通常、これらの大砲は、10ポンド以下の砲丸を投擲した。製造年の確定できない外国製大砲が見られた。その船の甲板に縛られた大砲が大き過ぎるジャンク船の一例を挙げると、一人の外国人の見たとこ、もし大砲が実際に発砲されれば、ジャンク船を沈没させるか、あるいは発砲後の後座により海に投げ飛ばされることは確実であった。¹⁷⁾ 大砲は、頑丈な砲床か、むき出しの回転砲架の上に据え付けられた。粗悪な、むらのある火薬が使用された。軍用ジャンク船は、伝統的な各種の小火器も運んだ。それらは、^{やり} 槍、^{ほこ} 矛、剣、マスケット銃（gingal）、それに「大量の良質の石」ですらあった。¹⁸⁾ そのような船をイギリス3等艦の74門艦と比較するとか、あるいは、より低位なものでいえば、アヘン戦争で他の同じ様な艦船と協力して中国艦隊に大損害を与えた実験用鉄製艦「ネメシス（Nemesis）」号のような武装汽船と比較するのは、バカバカしい。旋回砲か火矢で武装した単なるボートを使用しただけの船乗りが、15隻か20隻ほどの軍用ジャンク船を打ち負かした例もある。¹⁹⁾

もし個々の中国軍用ジャンク船が、19世紀イギリスの帆船や汽船に対抗するには弱体且つ無力であったとすれば、中国水師の組織は、その差異を尚更いっそう劇的なものにした。というのも、計画されたいかなる軍事努力の足をも引っ張ったからである。旧水師の大部分は、中国緑営陸軍の一部であった。それは満洲族により創設され、京師に集められた満洲八旗を除いて、一種の地方警察隊であった。北京の兵部は、実権を持たなかった²⁰⁾。軍機処は、兵部を使わずに王朝の軍事指令を発することができた。強い皇帝は、彼の軍事力の全てを調整することができた。弱い皇帝でさえ、彼の官員を罰する権力を持っていた。第二階級の武官は、直接建議権により皇帝と直接繋がっていたので、緑営制度の誤りは、その中央集権化をなし得なかったことであるとは、ほとんど言えないのである。

緑営部隊は、陸海共に、各省により組織された。清朝中国の諸省は、二つの省にまとめられ、通例では、総督の下に置かれた。海に接した中国本土では、そうした四つの組合せあるいは地方が存在した。すなわち、広東省と広西省を連結したのが^{カンシー}両広であり、^{りようこう}閩浙は福建省と浙江省、^{りようこう}両江は江蘇省と江西省、安徽省を連結したものである。^{こうせい}直隸省は、首都が置かれた単独の省である。山東省は、山東巡撫のもと独り立ちしていた。総督、そしてその下位に位置する巡撫は、省の命令系統の頂上に立っていた。これらの文官は、兼務するよう指令を受けることで、兵部尚書あるいは兵部侍郎を兼任して、軍事的な権限を保持した。²¹⁾総督・巡撫の下、各省では、緑営の総兵と提督が、それぞれ陸営と水師のために赴任して来た。

しかし、この命令系統には、多くの破損があった。上に挙げた諸官僚は、中国陸海軍を指揮した。各省駐防八旗軍は、八旗軍自身の司令官（いわゆる將軍）の支配下に置かれ、省当局に従属しなかった。所定の地区に駐在する將軍は、普通は総督よりも上の地位にあり、その軍隊は、常により大部隊であった。沿海諸省の中の5省において（東三省は全て満洲人により統治された）、すなわち広東省、福建省、浙江省、江蘇省、^{ほうてん}奉天省において、將軍は水師も持っていた。²²⁾

そのうえ、総督と巡撫の間に、よく行き違いが生じた。総督は、各巡撫に直属する省官僚を支配していなかった。例えば、^{ふせいし}布政使や^{えんうんし}塩運使等である。これらの省官僚たちは、北京から直接任命された。そして、租税収入や、場合によっては軍務を取り扱わねばならなかった。これらの高官は皆、直接建議する権利を享受していた。ここには、行き過ぎを抑制して中庸を得る満洲体制があり、この体制の中で満漢高級官僚は互いに監視しあった。総督と巡撫は、単独で部下を告発する権利を持っていたが、この規定は、各地方あるいは省においては、唯一の強力な指令系統の役には立たなかった。²³⁾

これらの高官の下には、他にも文武両方の権限を備えた高官——例えば、道台がいた。各地方においては、1840年の浙江省に典型的に示される責任のぼやかしがあった。イギリス軍が定海の近くにいと聞くと、浙江提督^{しめくていひよう}祝廷彪は、彼の軍を海に導いた。同時に、寧紹台道台の^{りしやう}李紹^{ほう}昉は、水師を定海に導いた。その少し後で、寧波府（知府〔^{とうていさい}鄧廷彩〕）は、購入した船を沈めることや、筏に組んだ木をタテに繋いで木城とすることで防材とし、敵の侵入を阻止するよう命じられた。²⁴⁾加えて、各高官は、それぞれ彼自身の司令部を持っていた。沿海の八旗・緑営常備軍においては、24の司令部が存在した。それらは、均等に設置されたわけではなかった。その分布状態は次のようであった。広東省と福建省にはそれぞれ五つの司令部が存在した。総督、巡撫、提督、総兵、將軍の司令部である。ところが、直隸省は、総督と提督のために二つの司令部があるに止

²⁵⁾ まった。これらの所謂「直轄の司令部」は、名目的には旅団兵力から成っており（軍人の麾下にある司令部は、文官の麾下にある司令部よりも大きい）、充分に独り立ちしていた。直轄の司令部の下に置かれていない他の各省の緑営軍は、任命された官僚によって「間接的に」支配されていた。この制度の下では、総兵の中に、自分の上官よりも強い兵力を持つ者もいた。軍事権を有した地方文官の中には、ほとんど独り立ちしてはいるが、「直接の」指令に対応して行動するだけの者もいた。場合によっては、地方官が、3人から4人の上司に責任を負わねばならなかった。台湾水師營の総兵が、台湾の原住民については兵部と連絡を取り、且つ閩浙総督だけでなく、福州に駐在する将軍及び海軍提督にも凝視されていたようにである。²⁶⁾

この手の込んだ制度では、水陸師の組織に関する緑営のテーブル（旅団、連隊、大隊、戦隊、基地）は、ほとんど視界から姿を消した。しかしそれでも、その混乱は、清朝の衰退に何の作用もなかった。その制度は、主に康熙帝により創出され、安定性を確保していたのである。²⁷⁾

伝統的な水師の人事制度について論評する場合、主に母体となる緑営陸師に直接関連する材料を基礎にしなければならない。各省の地方軍には、緑営官僚に関わる九つの階級が存在した。水師の呼称は、イギリスで同等のものに当てはめると、提督（admiral）や総兵（senior post captain）、副将（junior post captain）、参将（commander）、遊撃（lieutenant commanding）、都司（senior lieutenant）、守備（junior lieutenant）、千総（sub-lieutenant）、把総（ensign）に近かった。これら9階級は、提督が相対する文官階級の上位半分にランク入りしていなかったことを除いて（文官の各階級は上位半分と下位半分に区分されていた）、九つの文官の階級に基本的に対応していたが、より低位に置かれていたに過ぎなかった。軍務は、公務の名声を持たなかったのである。²⁸⁾

将校を新規に補充する際、その出自は、文官、世襲貴族の諸階級、将校の子息、陸軍、武官試験に及第した志願者、それに一般の兵員であった。水師の将校の中には、身分の高い人の申し出により古巣から声が掛かって誘い出された元海賊もいた。²⁹⁾昇進の基準となる詳細な規則が存在した。規則の中で、昇進は名目上は年功と功績の積み重ねが基本であった。しかしながら、皇帝は、その規則を無視することができたし、将校は皆が専門家というわけではなかった。上流階級において、皇帝の介入は最も著しかった。守備以下は、省権力を有する者が、将校と下士官の決定権を持っていた。彼らが好んだのは、船乗り、漁夫か元海賊、あるいは陸軍で見られたのと同様に、戦果を挙げた人物であった。福建は、水兵の良き供給源であった。福建の海賊は国家の「精華（flower）」³⁰⁾を含んでおり、帝国艦隊は主に「カス」を持っていたと言われた。

報酬や名誉、退職手当について詳細な規定が存在した。緑営の罰則は、1731年から始まる基本法典〔雍正会典^{ようせいかいてん}〕から引かれた。その法典は、ほんの少しだけ改正されていた。将校と兵士は、同じ刑罰に従うわけではなかった。前者については、矯正的な恥辱をかかせることに重きが置かれた（1830年代に一人の西洋人は、上海の近くで耳に矢を突き通された水師将校に気が付いたが、その男には軍事法規を軽視したとする御触書が付けられていた³¹⁾）。その罰則は、〔法規に違反した〕将校の降格処分を含むが、官職はその地位のままにされた。臆病風あるいは反逆罪については、法典は一律に死刑を定めている。法典の施行は、皇帝の意志に拠っていた。軍事法廷による罪状の調査に関する規定は存在せず、判断基準は結局のところ道徳であった。そのため、最終的な判断は、天子だけが行使し得たのである。刑罰の妥当性、あるいは皇帝の気分が不確定であることは、戦闘中の者には周知のことに違いないし、高官には、間違いなくよく知られていた。³²⁾

大抵の訓練は、所定の沿海巡視中に催された。これらの巡視は、必ずしも適切に実施されては
 いなかった。というのも、1806年の上諭は、〔1790年に厳命された〕沿海訓練に関する服務規定
 に言及して、統兵官に対し有能な官員を抜擢することや、〔水師を訓練するに当たり〕彼ら自身
 が外洋に出るように警告していたからである。アヘン戦争の直前には、水師の官員に毎年試験が
 課される制度が定められた。彼らは、またもや〔³³⁾ 考査を加えるため〕自ら出洋するよう命じられ
 たのである。1840年に、特命大臣〔欽差兵部尚書祁 雋 藻・³⁴⁾ 刑部右侍郎黃 爵 滋ら〕は、人材の不
 足と各省で行われた日常訓練の下手際について懸念を表し、水師のために将領を選抜する特別な
 制度を要請した。³⁴⁾ 武官試験は茶番であり、おそらく大抵の将校は、とにかく将校たる資格を維持
 していなかった。1830年代の西洋人目撃者は、中国人船乗りが「沿岸航海のみ」に熟達してい
 ると書き残している。海岸は、「かなり正確な」港の地名とともに知られていたが、典型的な水師
 将校は、明らかに大海原の航海に熟練していなかった。推測航海法 (dead reckoning) ³⁵⁾すら使わ
 れていなかった。

各省の緑営水師營の活動を統合する公的規定が存在した。各省の「駐屯部隊〔汛〕³⁶⁾」は、連結
 する巡察区域を持っていた。ともかく時季になると、沿岸は巡遊する船で覆われた。何もせずに
 じっとしていると処罰された。1750年のように、時に特別な配置がなされることがあった。その
 年、多くの商船が行き交う閩浙沿岸には、3人の督撫と様々な地方官を含め、特別な巡察範囲が
 与えられた。満洲の水師營は、そうした巡察に参加しなかった。³⁶⁾ しかしながら、商人達が海賊に
 対抗するために彼ら自身の保護者をよく雇ったことは、これまで既に注目されてきた。1800年に
 は、巡察制度が再編成された（ところが、別の上諭の中には、士官が実際に³⁷⁾ 出洋せよとの皇帝の指令を
 含む例がある）。1831年に、一人の監察官は、提督は固定された区域に巡航を制限されるべきでは
 ないと陳べた。彼の要請は拒否された。その理由は、もし実行されれば、責任が明確に区分でき
 なくなるからであった。全てを考慮すると、巡察制度が、どのように上手く、あるいは規則正し
 く³⁸⁾ 施行されたのか疑問に思う。

軍事指導者は、混沌とした状態の中にはいなかった。各々は、任命や建議、欠かせられない定
 期的な謁見、懲罰のおそれによって中枢と結び付けられていた。しかし、軍隊の組織は、その問
 題に関する最近の一学生の言葉によると、「戦時中には、ほとんど使い物にならな」³⁹⁾ かった。非
 常事態の間中、特命欽差大臣が任命されることで、問題はあっという間に複雑になった。特命欽差大臣
 が代行する権力は、おそらく古くからの仕組みを即座に動かすことができたからである。

脅威に晒された地帯に集合可能な軍用ジャンク船の数について言えば、19世紀には余りに少数
 の船しか存在しないか、あるいは余りに少しか調整がつかないために、実のところ見せ物にし
 たところで印象を与えられるような代物ではなかった。トーマス・F・ウェードは、19世紀中葉
 の中国軍に関する優れた研究の中で、これらの船隊の兵力を列挙している。すなわち、広東は
 159隻、福建は272隻、浙江は302隻、江南は108隻、山東は12隻、奉天は10隻である。⁴⁰⁾ 明代の初期
 には、防衛基地は、2,700隻の軍用ジャンク船を持っていた。明らかに、〔数が〕⁴¹⁾ 減っていた。そ
 れだけでなく、たとえ編成上の計画がそうした行動を容易にしたとしても、諸船に違いがあり過
 ぎて、大した合同行動をとれなかった。実際には、概して僅か2、3隻の軍用ジャンク船が、1
 箇所に浮かべられていただけである。1833年のことであるが、宣教師のチャールズ・ギュツラフ
 (Charles Gutzlaff) は、中国沿岸を不法に探査していた英国武装商船の乗客であった。ギュツラフ

は、たとえ提督の司令部であり、提督が5,237名の兵士を召集したと推定されるとはいえ、南澳^{なんおう}（Namo）において船は7隻か8隻であると書き残している。⁴²⁾1839年11月に、アヘン戦争で最初の武力衝突が生じたとき、関天培提督は、29隻の軍用ジャンク船を広州沖に寄せ集めた。1842年にイギリス軍が呉淞^{ウーソン}を占領したとき、100隻から成る外来の艦隊に遭遇した。ところで、それらの大部分は、公務に引っ張り出された漁船であった。

調整の不足を示す具体例は、1840年の夏と初秋における閩浙沿岸の組織状況である。当時北方へ最初の海軍遠征をしていたイギリス軍は、7月5日に定海（寧波に近い、浙江沿海沖の舟山諸島にある）を占領した。2,3隻の軍用ジャンク船が、弱々しく抵抗した。それらの船について、一人の英国人観察者は、「彼らは、我々の攻撃の遂行を待たなかったなら、皇帝からの期待すべき慈悲はなかったのである〔イギリス軍の攻撃により破壊されたからこそ、皇帝の慈悲をうけることができたの意〕。彼らは最も献身的にそれを行い、そしてほとんど即時に破壊されたのである」と皮肉たっぷりに書いている。⁴³⁾閩浙総督は、鄧廷楨^{とうてい}であった。彼の「直属の」配下は、水師の大軍であった。福建水師提督は、福清^{ふくせい}に常駐していた。福州には、王朝内では同類の中で一番給料の高い將軍の下で、水師の大軍が存在していた。廈門^{アモイ}は、堅固な巨大砲列を備えた、強力な水師の基地と見なされていた。⁴⁴⁾これらのうち何れの場所でも、海上での抵抗はなかった。浙江省は、烏爾恭額^{オルコンコ}が巡撫であった。しかし烏爾恭額は、黄岩^{こうがん}、温州^{おんしゅう}、舟山に三つの水師旅団を擁する、浙江省の提督には直接指示しなかった。乍浦^{さほ}にも水師營があった。

定海が陥落したため、〔責任者が〕処罰された。8月に〔浙江巡撫の〕烏爾恭額が罷免され、後任には劉韻珂^{りゅういんか}が就任した。浙江提督〔祝廷彪〕も解任され、後任には福建提督の余步雲^{よほうん}が就任した。加えて、両江總督の伊里布^{イリブ}が定海を奪還せよとの勅命を受け、欽差大臣として浙江に派遣された。⁴⁵⁾

烏爾恭額は、皇帝が鄧廷楨に福建艦隊の浙江派遣を指示し、伊里布（まだ南京にいた）には水師營の派遣を指示するよう奏請した。自分の降任を知る以前のことである。鄧は、皇帝の指令に対し次のように答えた。すなわち、鄧は軍隊を割く余力はないが、浙江の救援に〔派遣した建寧兵500名は陸路の兵丁であり、海に出動するのは難しいので〕1,000名の「水勇」を補充するよう指示したと返答した。烏爾恭額が解任されてのち、鄧は再び、2,000の福建海員を求める元巡撫の要望には応えられないと上奏した。⁴⁶⁾9月には、浙江に駐在する余步雲が、広東及び福建からの海軍増援を要請した。この要請を皇帝は、寧波に駐在する伊里布に問い合わせた。伊里布自身は、軍隊を要請した。そして、余步雲は、彼の最初の要請が何の結果も得られなかったので、繰り返して請願した。⁴⁷⁾

定海は、武力では取り戻されなかった。しかし、失敗に終わった1841年1月の穿鼻仮協定に関連して中国に返された（定海は、1842年にイギリス軍が二度目の北方遠征を敢行した際に再び占領された）。上述した要請や命令について興味深いのは、彼らが指令の状況を明らかにしていることである。すなわち、巡撫は、皇帝を経由してのみ彼自身の総督に提案し、そして特命を帯びた軍司令官〔欽差大臣〕は、自分よりも位の高い両方の高級文官〔総督と巡撫〕だけでなく、浙江提督をも無視した。おそらく浙江巡撫は浙江提督の指令下に置かれていたと推定される。⁴⁸⁾そして、全ては、浙江のために援軍を要請することであった。浙江援軍は、せめて相棒の福建省から部分的にでも行うべきであった。総督と同格の欽差大臣である伊里布でさえ、閩浙総督が引き受けた軍

隊の移動について皇帝が彼の意見を求めたにもかかわらず、彼自身の権威に基づいて軍隊を移動しなかった。明らかに、欽差大臣の指名は、既に過剰に存在した皇帝への通信経路をもう一つ開いたに過ぎなかった。水師の中央集権化は産み出されなかったのである。

組織化されていない状態が一般に広まっていたことを示す更なる証拠は、イギリス軍が、北方に遠征した際に侵入・征服した港を封鎖するために、船を2隻以上は残さずに、通常はただ1隻だけ残したという事実である。1842年の夏には、禁じられていた長江上流での最後の攻撃で、イギリス軍が下流の河口域の見張り⁴⁹⁾を任せしたのは、26門の大砲を備えた「ノース・スター (North Star)」号ただ1隻だけであった。侵略者たちは、伝統的な中国水師の散在する部分の間を全て含んだ協業がないことを畏れていたのである。

伝統的な水師に関する組織上の分裂は、更なる問題を示唆している。すなわち、水師は、総合的な戦略、あるいは広範囲にわたる、目的のある任務を持たなかった。清朝時代において、水師は、厳密には海賊を鎮圧するための兵力であった。非常に印象に残る海賊鎮圧任務は、施琅^{しろう} (1621-1696)、及びその息子の施世驃^{しせひょう} (1721年に死去)、そしてまた李長庚^{りちやうこう} (1750-1808) によって指導された。1721年に、施世驃は、福建提督として600隻の船を率い、台湾で叛乱を打ち負かした。19世紀の変わり目に、李長庚は、浙江提督として、安南人^{アンナン}及び中国人海賊と根気強く戦った。とはいっても、彼の船は、海賊の船よりもたいてい小さかったし、彼は時に、省当局者を説得して供給させた特別基金を使って、より大型の船を建造しなければならなかったのである⁵⁰⁾。他方、海賊は、大抵は無視されるだけであったか、買収された。不足していたのは、遠く沖合で敵と対戦する伝統であった。たぶん海賊鎮圧活動は、大海原での戦略を産み出さなかった。——海賊が日本人であった明朝時代の初期には、「倭寇は海路でやって来る、そして海で戦われるべきである」、なぜなら「倭寇を海で撃退するのは容易だが、上陸した後で撃退するのは困難である」からと言われたのである⁵¹⁾。ところで、1660年代に清朝は、海で荒くれ者^{せんかいれい}と対戦するよりも、むしろ「遷海令^{てんかいれい}を発して」沿岸の全住民を強制移住させることによって、台湾を根拠地とし明に忠誠を誓う鄭成功^{ていせいこう}との戦いを回避したのは、賢明と思われる。

清朝の建国後、海上の挑戦が主に西洋から到来した。18世紀には武装外国船が時折現れた。それらの中にイギリスの戦艦があった。広州は、1757年以後西洋貿易に門戸を開く唯一の港であったが、清朝はこの地の沿岸内水路から外国軍人を排除していた。イギリスの戦艦は、常にこのことに気を付けていたわけではなかった。我々は、こうした攻撃に対する中国側の対応をみることで、中国の海軍戦略を理解できるのである。中国人が騒々しい外国人の船に対抗するために、侵入者を締め出すか、あるいは中国軍用ジャンク船を改良すべくなされた努力は大きくなかった。H・B・モース著『東インド会社の中国貿易に関する編年史 (The Chronicles of the East India Company Trading to China)』(全五巻)が水師に言及するのは、ほんの十数箇所のみである。そして、その何れの箇所も、清朝の規制を執行する者として水師を好意的な光の中に提示してはいない⁵²⁾。「蕃人」を整列させるためしばしば使用する主要な武器は、彼らを中国の海に招来する貿易の一時停止であった。例えば、1812年の戦争中に、「ドリス (H. M. S. Doris)」号が広州で米国の拿捕船を捕らえた際に、図々しくも中国の局外中立を侵害した。これに対応して、地方当局は貿易を中断した⁵³⁾。それは、公式的な中国朝貢体制の精神であった。そして、強制執行の範例を示す、全ての非中国人に向けての謙遜ぶった態度を伴っていた。

18世紀のイギリス海軍政策は、概して中国の法令をかなり尊重していたので、この非軍事的アプローチは、まずまず良く機能した。1834年に東インド会社の独占が廃止された後ですら——それ以来、より多くの英国船が広州貿易に参入し、会社の抑制に服従する必要がなくなったために、独占廃止はより多くの軋轢^{あつれき}をもたらした——イギリス海軍の艦船は、広州に「随時」訪問の際には「十分に用心深く且つ慎重に」行動するよう命じられた⁵⁴⁾。イギリス海軍の艦船は、決して防護要塞を奪い取りはしなかった。二三の例外を除いては、アヘン戦争まで、イギリス海軍は中国水師に戦いを挑むことはなかった。ところで、選択は常にイギリスの手中に委ねられていた。1834年に、ロード・ネイピア（Lord Napier）が、2隻の英国海軍船を広州に呼び、会社の独占が廃止されて以後の英中関係を調整する彼の任務を支援するよう命じたときに、船は虎門（Bogue）の要塞を通過して中に入り、血路を開いたのである。そして、防御するキャノン砲の砲丸は、ただ船の両側に当たって跳ね返り、時にはかろうじて要塞の大砲からごろごろと転がるだけであった⁵⁵⁾。1830年代の中葉に不法船であった「アムハースト（Amherst）」号に関するギュツラフの説明は、様々な港に浮かぶ軍用ジャンク船に対するコミック・オペラ風の言及に満ちている。すなわち、イギリスの小型望遠鏡を持ち上げる際に逃げ去ったり（〔中国側がこの動きを〕大砲を持ち上げていると誤って勘違いしたのである）、あるいは苛立ったイギリスの司令官が中国の旗艦のケーブルを切断するためロングボートを派遣した時に、侵入者から間近に観察されないように分散配置したとか、あるいは爆竹に火を付けることで満足しているといった具合である⁵⁶⁾。

おそらく中国水師には明確な戦略的伝統が欠如していると説明する根拠は、中国が広範囲にわたる海上植民地体制を持たなかったことである。15世紀に明の鄭和は、欧州が大航海時代に入る遙か以前に、巨大艦船を率いて何度もインド洋に進出し、遠くアフリカまで到達した。しかし鄭和は、新世界やスパイス、植民地を探し求めてはいなかった。途中で二三のちっぽけな統治者を捕らえたり、朝貢使節を強要して以後、これらの奥行きのある遠征は打ち切られた。この奇妙な廃止については、これまで様々な説明が提出されてきた。そしてその中には、経済的な困難や内陸アジア辺境における脅威が再発したのに加え、明朝官僚の儒教的な精神性が主に重要な役割を演じたのである⁵⁷⁾。鄭和は、戦略を定めはしなかった。19世紀において、中国水師の水兵は、一定の用兵上の感覚を持っていただけである。そしてその感覚は、海上の敵が中国の母港の視界内に到達したときに呼び起こされたのである。この種の活動には、（ナポレオンを負かした英国艦隊に関するマハンの記述を使うと）「遙か遠くで、嵐によって損害を受ける船」は、必要とされなかった。軍用ジャンク船そのものよりも、陸上の要塞と大砲が中国の防衛をよく象徴していた。

広州の要塞は、中国の河川及び海岸に築かれた最上の要塞の一例である。虎門は主要な要塞区域であり、珠江河口域において広州の下流約25マイル〔約40km〕に位置していた。この狭い河道の外側には、穿鼻と大角頭の両島が横たわり、どちらも要塞化されていた。4分の3マイルの虎門の水路は、阿娘蛙（Anunghoy）及び横檔（Wangtung）の両島で嚴重に装備された要塞によって補強された。内側には、小大角頭（Little Tycocktow）〔要塞の呼称〕と大虎島（Tiger Island）があり、簡単な防御工事がなされていた。虎門と広州の間には、ほかにも要塞が非常に多く存在した。なかには、遠く離れた三角州の端っこにあるものやたいそう古びた要塞もあった。大砲は、様々な種類があり、なかには明代のイエズス会士に由来するものもあった。林則徐は、1839年及び1840年の在職期間中に、その全体の体制を強化するため大いに努力した。林の後任たる琦善も

同じであった。1841年の初め、イギリスは、珠江の全体制から約1,200門の大砲を押収した——とはいえ、この数の中には、まだ据え付けられていないものや、準備に急ぎすぎたもの、それに、中国人の告白によると、過熱して破裂しやすいものもあ⁵⁸⁾った。広州の外面的には堅固な要塞は、定型的なものではなかった。沿岸に上陸したイギリス軍に占領された多くの港において、要塞は朽ちていたか、砂袋や泥、ひっくり返されたボートから成っていた。ボートの底は泥だらけのため、敵の一撃で無邪気に滑って転んでしまいそうであ⁵⁹⁾った。廈門は、造りの立派な砲列を有した。そして、イギリス軍が廈門を再度占領した1841年に、軍の一人は、「大砲の設置が可能な、あらゆる島、あらゆる突き出た岬が、占拠され、そして強力に武装された」と書いている。しかしながら、中国の提督は、「突然激しい熱意に取り憑かれ、ほかの場所で海賊の後ろを巡航した」と、その作者は続けている。巨大な要塞から実りのない砲撃が放たれた後、イギリス軍はあっさりと上陸し、城に向かって歩いた。軍隊のなかには、本物のはざま銃眼から入るものがいた⁶⁰⁾。常に容易に占領できるわけではなく、1842年の春に乍浦で、イギリス軍は、島上で猛烈な抵抗運動を受けた。これは、特徴的であった。現実存在する抵抗運動が、要塞から船に向けた抵抗か、あるいは陸上で発生したのである。⁶¹⁾

要塞は、他の防御手段により補われた。それらの中の一つは、偉大な中国古代に起源を持つ火筏（fire raft）であった。燃えながら敵の艦隊に向けて流すよう設計された火筏が、アヘン戦争の期間中に使用され、時には念入りに準備された。1842年に、イギリス軍は、寧波の近くでそれを37床押収した。その一つ一つには、可燃物や火薬が満たされており、「兵士のために革製の帽子と耐火性の服装」が調えられた。そして、彼らの脱出は、舢板^{サンパン}によって保証された。⁶²⁾

他にも補足物が据え付けられた。1839年に、2本の大きくて重い鉄鎖が、虎門の水道を横切^くって括り付けられ、ウインチで上下に巻き上げられるのが可能なように浮かべられた。この水門に詰めるために、約120名の水夫が任命された。あいにく、これらの鉄鎖は、進軍してきたイギリス兵士の重みで簡単に壊れた（防御者は、鉄鎖が敵の「水の悪魔」に繋がれていないと公言した⁶³⁾）。広東の取った手段もまた、所々に杭を打ってさえぎり、そうすることで多少の足止めを喰らわせようとしたのである。定海においてイギリス軍は、浙江港では単純にその杭の一方の端から上陸した。河川で取られた手段もまた、沈没させられたジャンク船や丸石か、あるいは筏や防材によって杭打ちされたのかも知れない。⁶⁴⁾

中国の防御者は、これらの防御に暗黙の信頼を持っていた。1839年に、一人の広東官僚は、以下のように自信を持って建言している。

既に幾重にも関門が設置されましたので、有事の際には兵船と火船を追加派遣し、上流に停泊させます。蕃人は頑冥を極めるといいますが、彼らが自ら陷穽に身を投じるとは考えておりません。……彼らがこちらの罠の中に闖入するに及んで、もし前進しようとするなら、排練につなぎ止められ、もし退却しようとするれば、風と水に阻まれるでありましょう。その間に我々の要塞の大砲は、全ての方角から次々と砲撃するのです。我々の火船は彼らを下流へと押しやり、兵船はそれに続きます。蕃人の船は鉄や岩のように頑丈であるといいますが、たちまち灰燼となりましょう。⁶⁵⁾

この戦術上の定石の重要な特徴は、軍用ジャンク船に割当られた従属的な役割である。軍用ジャンク船は、固定された防御装置の付属物として、河上で使用されることになっていた。こうした船の性能を効果的に発揮できない消極性は、「ケンブリッジ」号の物語によって例証される。1841年の初め、穿鼻会談の決裂後に、イギリス軍は広州の河川防御要塞を再び占領した。虎門から上流に遡る途中で、彼らは、一つの巨大な筏によって^{さえぎ}遮られた。それは、河岸から河岸へ約500ヤード〔約275m〕張り渡されていたのである。この遮断物の後ろに、彼らは良く武装された商船「ケンブリッジ」号を見つけた。この商船は、1840年の初めに米国人の持ち主から林則徐により購買されたのである。林なら、その1,080トンの船を有効に使用したかも知れない。しかし、「ケンブリッジ」号は筏の後ろに繋がれていた。そして、その繋がれ方では、ただ船のクロスボウが発射可能なかただであった。「ケンブリッジ」号は、34門の大砲を搭載していた。船の甲板は、清潔で且つ整頓されていた。消火バケツが、型どおりに排列されていた。多数の軍用ジャンク船も存在し、その遮断物の後ろあたりを動いていた。砲撃の応酬があったが、汽船の「ネメシス」号が英国右翼艦隊（等級のない6隻の武装船団）の増援を受けたとき、抵抗は止んだ。中国人乗組員が左舷の梯子をつかって立ち去ったとき、イギリス軍は、その右舷の梯子により「ケンブリッジ」号に乱入した。目撃した英国人バーナード（W. D. Bernard）は、「中国人は海軍の用兵を熟知しておらず、司令部では物資の最善の使用法すら実行できないほどであった」と書いて⁶⁶⁾いる。

時代遅れの装備、組織の崩壊、出鱈目な人員制度、消極的な防衛観念を考慮すれば、中国人がアヘン戦争でイギリスに大敗したことは、何ら驚くに値しない。皇帝が優柔不断であったり、指導部を頻繁に取り替えたことは、状態を悪化させた。不適当な財政制度は、もう一つの要因であった。中国王朝においては、現実には中央予算が存在しなかった。地方官僚が財源を集め、京師に分担額を送銀し、残額を彼らの通常の費用のために確保しておいたのである。この資金の大部分は、個人的に使用するために流用された。緑営は、各省により資金が調達された。時折、中央政府の指令により、特定の造船所に向けて〔非正規の〕特別補助金が付け加えられた。⁶⁷⁾〔1767年には〕経費を節減するため、一旦は天津水師營が全面的に撤廃された。⁶⁸⁾しかし宮廷は、諸省の内部における優先権を確定するについては影響力をほとんど持たなかった。防衛問題の大部分は、現場で解決されねばならなかった。費用を負担したのは、非常に多額の特別徴税を課せられた地方商人であった。広州の洋商は、上述した要塞や鉄鎖に要する資金の大部分を調達した。1840年1月に、林則徐は、商人達から調達した資金により支援を受けた義勇艦隊を集めたことを報告した。1840年の後半に、林、怡良、それに豫堃（^{よこん}粤海関監督）は、洋商〔怡和行の^{こしょうえい}伍紹榮〕が3年間自発的に巨額の資金を寄付したことを上奏した。⁶⁹⁾1839年に広東水師提督の関天培が、彼の部下に私財^{なげう}を擲^{こしら}って、未払給料⁷⁰⁾を払えることを誓ったように、時折、官員が自腹を切っていくらかの費用を支払うことすらあったかも知れない。

もし中国が西洋に対抗して自衛するつもりなら、旧水師に関する装備や組織、訓練、根本的概念において抜本的な変革を実行しなければならなかった。しかしながら、このことは技術的問題を超える問題であった。

註

- 1) 満洲王朝の「衰退」に関連する幾つかの問題の分析については, John K. Fairbank, Alexander Eckstein, and L. S. Yang, "Economic Change in Early Modern China: An Analytic Framework," *Economic Development and Cultural Change*, 9.1: 18 (October 1960).
- 2) 署名のない論説の "Military Skill and Power of the Chinese," *Chinese Repository*, 5.4: 177 (August 1836) は, 批判的な批評である。英国人中将からの好意的な批評としては, G. A. Ballard, *The Influence of the Sea on the Political History of Japan* (New York, 1921), pp. 135-136.
- 3) アヘン戦争に関する基本的な解説は, H. B. Morse and H. F. MacNair, *Far Eastern International Relations* (Shanghai, 1928), Chap. 7. の中に見出される。W. D. Bernard and W. H. Hall, *Narrative of the Voyage and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China*, 2 vols. (London, 1844) は, 英国人目撃証人による優れた記述である。
- 4) イギリス海軍における 6 等艦の一覧表については, John Masefield, *Sea Life in Nelson's Time* (New York, 1925), p. 11. を参照。
- 5) 写生画については, 包遵彭『中国海軍史』(台北, 海軍出版社, 1951年), 82~88頁を参照。
- 6) 工部の議論については, Hsieh Pao-chao, *The Government of China, 1644-1911* (Baltimore, 1925), pp. 269-270. を参照。各省に設けられた製造所については, 『清史稿』兵志 6 「水師」, 1~3 頁を参照。
- 7) T. F. Wade, "The Army of the Chinese Empire: Its Two Great Divisions, the Bannermen or National Guard, and the Green Standard or Provincial Troops: Their Organization, Locations, Pay, Conditions, and etc.," *Chinese Repository*, 20: 378 (1851).
- 8) 修理の年限については, 『清史稿』兵志 6 「水師」, 1 頁。また, 広東で年に一度行われる綱具修理については, [註 7 で挙げた] Wade, p. 378, も参照。
- 9) Masefield, *Sea Life in Nelson's Time*, p. 3.
- 10) 1732年から1840年までに列挙された指令については, 『清史稿』兵志 6 「水師」, 1~5 頁を参照。
- 11) 西洋海軍の発展に関するレビューについては, Charles L. Gibson, *The Story of the Ship* (New York, 1948), Chap. 13-14, を参照のこと。包遵彭『中国海軍史』87~88頁は, 明清が商船の大きさの規制に努めたことについて論じている。商船の様式を模倣せよとの指令が出されたのは, 1804年が最後である。『清史稿』兵志 6 「水師」, 3~4 頁, 参照。
- 12) 1740年及び1793年に, 商人が自分達で防護船を供給した例は, 『清史稿』兵志 6 「水師」, 3 頁を参照のこと。1809年の出来事は, H. B. Morse, *The Chronicles of the East India Company Trading to China, 1635-1834* (New York, 1926), III, pp. 116-118. の中にある。
- 13) W. D. Bernard and W. H. Hall, *Narrative of the Voyage and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China*, I, pp. 277-278.
- 14) Lo Jung-pang, "The Decline of the Early Ming Navy," *Oriens Extremus*, 5.2: 159 (December 1958) .
- 15) 工部のリストについては, Wade, "The Army of the Chinese Empire," p. 379. を参照。
- 16) "Military Skill and Power of the Chinese," p. 177.
- 17) *ibid.*, p. 173.
- 18) Bernard and Hall, *Narrative of the Voyage and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China*, I, pp. 278-281.
- 19) 例えば, 1841年1月のアンソン湾での戦いを見よ。Bernard and Hall, vol. I, Chap. 14.
- 20) Hsieh Pao-chao, *The Government of China, 1644-1911*, p. 256. H. S. Brunnert and Hagelstrom, *Present Day Political Organization of China*, tr. A. Beltchenko and E. E. Moran, rev. ed. (Shanghai, 1912), pp. 138-139. も併せて参照のこと。
- 21) Brunnert and Hagelstrom, *Present Day Political Organization of China*, p. 337; Hsieh Pao-chao,

- The Government of China, 1644-1911*, p. 291.
- 22) 満洲 = 中国関係に関する優れた議論については, Hsieh Pao-chao, *The Government of China, 1644-1911*, p. 298, 及び Brunnert and Hagelstrom, *Present Day Political Organization of China*, p. 336, を参照のこと。Wade, “The Army of the Chinese Empire”, pp. 319-320, は, 福州, 乍浦, 広州, 錦州 (満洲) における駐防八旗の水師營について言及する。
- 23) 各省官僚の関係, 直接建議権等に関する議論については, Hsieh Pao-chao, *The Government of China, 1644-1911*, pp. 259-260, 292, 299, を参照。
- 24) 烏爾恭額による1840年7月の報告を参照のこと。『籌辦夷務始末』(道光朝), 卷11, 7~10頁, 13頁。〔訳註: なお翻訳に際し, 典拠に基づき部分的に敷衍した箇所がある。〕
- 25) Wade, “The Army of the Chinese Empire”, p. 255. この出所は, Brunnert and Hagelstrom, *Present Day Political Organization of China*, p. 337. にある緑營の司令官の一覧に追加されたものである。
- 26) Wade, “The Army of the Chinese Empire”, pp. 373-374.
- 27) Ralph L. Powell, *The Rise of Chinese Military Power, 1895-1912* (Princeton, 1955), p. 14.
- 28) 中国語を付けた階級表については, 付録Bを参照のこと。
- 29) この人員に関する部分における基本的な指南書は, ウェードである。特に海賊船の購入に関する実例については, 例えば, Morse, *The Chronicles of the East India Company Trading to China, 1635-1834*, III, pp. 144-145. を参照のこと。
- 30) Charles Gutzlaff, *Journal of Three Voyages Along the Coast of China, 1831, 1832, and 1833, with Notices of Siam, Corea, and the Loo-Choo Island*, 3rd ed. (London, 1841), p. 148. ギュツラフは, 121頁で, 天津地域の福建人船員と彼自身のジャンク船員との間の諍いについて書いている。『清史稿』兵志6「水師」, 4頁は, 1816年に天津水師が再建された時, 福建及び他の南方諸省〔の撤廃された水師〕から水兵を募集したことに注目している。
- 31) Gutzlaff, *Journal*, pp. 215-219, は, 呉淞から上海区域でギュツラフが観察したことを扱っている。
- 32) 罰則制度の詳細については, Wade, “The Army of the Chinese Empire,” pp. 400-401, を参照。
- 33) 1806年, 1830年, 1835年の上諭については, 『清史稿』兵志6「水師」, 4頁。
- 34) 『籌辦夷務始末』(道光朝), 卷12, 11~14頁。
- 35) Gutzlaff, *Journal*, pp. 84-87. ギュツラフは, 50名の仲間と共に, 250トンの商船に乗ってシャムから天津まで旅行した。
- 36) Wade, “The Army of the Chinese Empire,” pp. 376-377, は, 全ての沿岸を包括する。更に詳しくは (山東, 直隸, 遼寧), 『清史稿』卷6, 1頁, 13~14頁を参照のこと。『清史稿』卷6, 10頁には, 罰則に関する言及がある〔訳註: この記述に該当する箇所は, 「……有引避不巡, 或巡而不周遍者, 論如軍律。」であろう〕。福建・浙江の配置については, 『清史稿』卷6, 1頁を参照のこと。ウェードは, 同書319頁で満洲部隊が除外されたことに言及している。
- 37) 『清史稿』兵志6「水師」, 2頁。Wade, “The Army of the Chinese Empire,” p. 378.
- 38) *Chinese Repository*, 4: 12, 562 (April 1836).
- 39) Powell, *The Rise of Chinese Military Power, 1895-1912*, p. 15.
- 40) Wade, “The Army of the Chinese Empire,” p. 379. は, 外海水師だけの総額である。378頁で, ウェードは, 広東省の巡航計画について議論している。五つの区域の各々に向けた巡航船の平均は, 13隻であった。
- 41) Lo Jung-pang, “The Decline of the Early Ming Navy,” p. 148, note 2.
- 42) *Chinese Repository*, 4: 12, 562 (April 1836).
- 43) Sir John F. Davis, *China During the War and Since the Peace*, 2 vols. (London, 1852), I, 3-4.
- 44) 1マイル位の長さの廈門要塞の記述については, *Ibid.*, I, 21, 156 を参照。福州將軍については, Wade, “The Army of the Chinese Empire,” pp. 373-374, を参照。
- 45) Authur W. Hummel, ed., *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1911*, 2 vols. (Washington,

- D. C.: 1943, 1944) における伊里布の項目を参照。1840年7月20日の上諭については、『籌辦夷務始末』（道光朝），巻11，7～10頁。
- 46) 『籌辦夷務始末』（道光朝），巻11，7～10頁；巻12，15頁，23頁；巻13，23～25頁。
- 47) 『籌辦夷務始末』（道光朝），巻14，3～4頁，8～9頁。
- 48) Brunnert and Hagelstrom, “*Present Day Political Organization of China*,” p. 337. Wade, “The Army of the Chinese Empire,” p. 375, は，浙江水師は主に沿岸の管理単位であり，巡撫は実際には提督に返答していなかったが，彼の等級のおかげで，閩浙総督から彼の指導を得たことを指摘している。
- 49) H. B. Morse, *International Relations of the Chinese Empire*, 3 vols. (Shanghai, 1910-1918), I, 266, は封鎖の配置について知見を与える。
- 50) ハンメルにおける施琅〔II, p. 653〕，施世驄〔II, pp. 654-655〕，李長庚〔I, pp. 446-448〕の項目を参照のこと。
- 51) 引用は，Lo Jung-pang, “The Decline of the Early Ming Navy,” p. 157.
- 52) Grace Fox, *British Admirals and Chinese Pirates, 1832-1869* (London, 1940), pp. 27-29, は訪れた戦艦を列挙する。また，Morse, *Chronicles*, Vol. 3, Chap. 61, Appendix P, もそれらを列挙する。
- 53) ドリス事件については，*ibid.*, III, 214-222. を参照。
- 54) Fox, *British Admirals and Chinese Pirates, 1832-1869*, pp. 49-50.
- 55) *Chinese Repository*, 5. 4: 166-167 (August 1836); Morse, *International Relations of the Chinese Empire*, I, 135.
- 56) 福州及び寧波・定海区域への訪問については，Gutzlaff, *Journal*, pp. 170-183, 185-201.
- 57) 論議については，Lo Jung-pang, “The Decline of the Early Ming Navy,” pp. 162-168, を参照。
- 58) 広州の要塞に関して十分な記述をしているのは，Bernard and Hall, *Narrative of the Voyage and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China*, I, 238-241, 329-331, and Chap. 18. である。大砲に関する論評については，*ibid.*, I, 333-341; II, 32-33. を参照のこと。破裂しやすい大砲があったという告白については，『籌辦夷務始末』（道光朝），巻20，27～32頁に収録された，琦善の報告を参照のこと。
- 59) 砂袋，ひっくり返ったボート等々については，祁寓藻，鄧廷楨その他による1840年3月16日付の上奏文を参照のこと。『籌辦夷務始末』（道光朝），巻10，19～23頁。
- 60) 廈門の要塞については，Davis, I, 155-157; Bernard and Hall, II, 123. 後者の記述は，文献の中に引用された資料を含む。
- 61) *Ibid.*, Vol. 2, Chap. 33, は，乍浦の記述を含む。イギリスは，13名の兵士を失った——戦時中の行動の中で最も大きな損失である。
- 62) Bernard and Hall, *Narrative of the Voyage and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China*, II, p. 285.
- 63) *Ibid.*, I, 329-331, は，1841年1月におけるイギリスの鎖や要塞への攻撃に関する詳細を含む。また，『籌辦夷務始末』（道光朝），巻20，24頁，27～32頁に収録された，1841年1月27日及び30日の琦善報告を参照のこと。
- 64) Bernard and Hall, Vol. I, Chap. 18, は，そうした装置について多くを割いている。
- 65) 『籌辦夷務始末』（道光朝），巻6，4～5頁。〔訳註：原文は次の通り。「重關既設置。臨時仍加派兵船火船。停泊上流。該夷雖極冥頑。諒不肯自投陷阱。……妄圖進口情事。我則以逸待勞。迨其闖入穀中。欲進則排鍊羈絆。思退則風水不容。而各臺大礮。連環轟擊。火船下壓。兵船繼之。夷船縱堅如鐵石。要亦頓成灰燼。〕〕
- 66) 「ケンブリッジ」号は，1841年2月27日に見つけ出された。Bernard and Hall, I, p. 353, 359.
- 67) 1736年の指令については，『清史稿』兵志6「水師」，2～3頁を参照。
- 68) 1767年の指令については，『清史稿』兵志6「水師」，12頁を参照。〔再び水師1,000名が設けられた

のは、約半世紀後の1816年である。]

69) 鎮等に商人が同意した点に関しては、1839年3月の鄧廷楨らによる上奏文を参照。『籌辦夷務始末』（道光朝），巻6，3～6頁。林則徐らの上奏文については、『籌辦夷務始末』（道光朝），巻10，36～37頁，を参照。

70) *Chinese Repository*, 11: 432 (1842), Bernard and Hall, I, pp.319-324.

〔表B〕 官位表

	陸 軍	海 軍	官 位
提 督	General-in-chief	Admiral-in-chief	1b Same
総 兵	Brigade-general	Senior post-capt.	2a Admiral-of-divisions
副 将	Colonel	Junior post-capt.	2b Commodore
参 将	Lietenant colonel	Commander	3a Captain
遊 撃	Major	Lt. commanding	3b Same
都 司	First captain	Sr. lieutenant	4a Commander
守 備	Second captain	Jr. lieutenant	5a Naval lt.
千 総	Lieutenant	Sub-lieutenant	6a Lieutenant
把 総	Sergeant	Warrant ?* Ensign ?*	7a Ensign
外委千総	Second Sergeant.	Chief petty officer*	8a Sergeant
外委把総	Corporal	Perry officer*	9b Lance sergeant

〔出典〕 中国の位階に相当する陸軍の階級については、Mayers, *The Chinese Government*, 3rd ed., Shanghai, 1897, pp.65-66. を参照。メヤーズは、陸海軍の階級は緑營と同様であると陳べている。150～151頁で、彼は、欧州海軍の階級に関して中国語に翻訳している。私は部分的にこの二頁から海軍で同じ階級に相当する序列を得た。彼の付表の日付は、1897年である。そして、commander-in-chief, admiral, vice-admiral, rear-admiral, commodore から始めて、〔それぞれ「水師統領」, 「頭等水師提督」, 「二等水師提督」, 「三等水師提督」, 「水師総統」の如く〕中国側の階級に割り振っているが、それらは中国の伝統的な文書の中に現れない〔架空の〕ものである。これら追加されたものは、提督と総兵の間に落とし込まれており、その水準からメヤーズは、よく知られた中国の階級を使用し始めている。彼のリストでは、海軍に関する最後の三階級も除外されている。それで私は、ここに海軍の同じ階級を作り、私自身の提案には星印を付けた。この階級表は、本書を通じて使用される。

最後の序列表は、官位と海軍の同じ階級を示している。Wade, "The Army of the Chinese Empire," p.364. から作成している。しかし、この表は、陸軍と海軍の階級を混合しているように思われるので、ただ比較のために提示したまでのことである。